

機能解剖で斬る神経系疾患 第2版

編著：中野 隆（愛知医科大学医学部解剖学講座）

高橋 昭

名古屋大学名誉教授

「暗記」ではなく「納得・理解」の書である

神経解剖学は、医学生にとって取っ付きにくい基礎医学である。神経系は、ほかの臓器と異なり、実物を観察する機会がなく、伝導路などを視覚化しにくいことに理由がある。欧米では、近年選択に迷うほど素晴らしく美しい脳や脊髄に関するアトラスや神経解剖学書が発行されている一方、神経系の機能と形態との密接な関連性に重点を置いて書かれた「機能解剖学書」はごく少ない。

最近、解剖学者中野隆教授の編著になる『機能解剖で斬る神経系疾患 第2版』が刊行された。本書は、解剖学書であると同時に、神経系の機能との関連性に重点を置き、さらに臨床症候やベッドサイドの神経診断学についても言及されている魅力あふれる個性的な「神経学書」である。

本書には、類書にみられない以下のような推奨すべき点がある。

1. 現在市販されている本邦で最新の「神経機能解剖学書」である

「Functional neuroanatomy（機能的神経解剖学）」と題する成書として、Chusid 著 *Correlative Neuroanatomy and Functional Neurology* が手頃なサイズのうえ、比較的安価でもあり、版を重ね愛読されていたが、1973年の15版をもって絶版になった。最近

は、Afifi 著 *Functional Neuroanatomy: Text and Atlas* (2005, 2nd ed) が刊行されたが、高価であり、すでに十数年経っており、改版もされていない。

本書『機能解剖で斬る神経系疾患 第2版』は、2011年に初版が刊行、今回はその改訂新版が刊行された。日本での現在市販されており入手容易な唯一の神経機能解剖学書である。

2. 臨床神経学とも密接な関連をもって執筆されている

本書の第2の特徴は、臨床神経学との深い関連をもって書かれていることである。神経系が障害され、正常の機能が失われたときに発現する臨床症候とその診断手技にまで言及されており、これは類書にはみられない本書の一大特徴である。

たとえば、除脳硬直や除皮質硬直はほとんどの書でネコの実験的な図が挿入されているが、本書ではヒトでの姿勢異常が図示される(p.157)など、臨床面が重視されている。

3. 著者自身作の模式図が多く挿入されている

本書には図が多い。しかも、その多くは編著者中野先生ご自身が作図された原図である。脳や脊髄のマクロ解剖も豊富にあれば、伝導路が模式化され、しかも病変に伴う臨床症候が解剖生理学的に説明されている。1例として、脊髄



腫瘍の髄内と髄外の差 (p.43~44)、また脊髄空洞症 (p.53) などに神経症候の病態が簡潔に図示され、まことに理解しやすい。しかし、有名な Penfield による大脳の運動野や感覚野の局在を示す「小人間像」(homunculus) は「近年の研究において、その概略は正しいが、必ずしもそれほど規則正しい配列ではないことがわかってきた」(p.29) として図示されている。

4. 引用文献は古典的なものから最新のものまで豊富である

本書には、Romberg 徴候 (p.89) や Horner 徴候 (p.213~217) など、随所に歴史的記載が紹介され、しかもその原著論文が引用されている。一方、2016年など最近の海外、国内の文献まで数多く引用されている。

以上、本書は類書にない多くの特徴が盛り込まれている。医学部学生向けの「暗記」の書のみでなく、専門医にも「納得・理解」の神経機能解剖学の書として、高く評価、推奨できる。

●定価（本体 6,000 円＋税）
B5 判, 408 頁, メディカルプレス